【書評】

Brian Henderson: Nerve Language

熊 谷 哲 哉

芸術作品としての意図をもたずに発表された著作や、正気を失った人間によって残された記録や叙述を私たちはどのように受け止めることができるのだろうか。作品として発表されたわけではないものが、おもしろいもの、価値のあるものだと感じられるとしたら、それをいったいどのように評価し、論じることができるのだろうか。このような問題については、すでに多くの精神分析家や思想家、病跡学者らが取り組んできた。ブライアン・ヘンダーソンの「Nerve Language」は、このような重要かつ多分に不可能性を含んだ問いに対して、詩集という形でひとつの回答を提示している。[1]

本書はカナダの詩人・評論家であるブライアン・ヘンダーソンの9冊目の詩集で、2007年度のカナダ総督賞（詩集部門）の最終候補に選ばれた。ヘンダーソンは、1948年にオンタリオ州キッチナーに生まれ、ヨーク大学でカナダ文学を専攻し博士号を取得している。さまざまな職業（ライター、カメラマン、電話工事技術者など）を経て、現在はウィルフリード・ローリエ大学出版局の編集者として勤めている。[2]また、詩作以外にも、カナダの文芸誌に評論なども数多く発表しているという。

ヘンダーソンの詩集「Nerve Language」はそのタイトルからも分かるように、ダニエル・パウル・シュレーバー(1842~1911)の『ある神経病者の回想録』に題材をとっている。控訴院民事部部長として活躍していたシュレーバーを突如襲った病は、彼の精神を浸食し、一つの物語を作らしめた。それこそが彼の残した唯一の著書『回想録』である。シュレーバーの病とは、神との解きがたい結びつきによって、思考をかく乱され、肉体を傷つけられ、最終的には女性の身体へと作り替えられるという苦しみのことである。1903年に出版された『回想録』は、同時代を生きたユングやフロイトをはじめ、ベンヤミンやカネッ

---

[1] 以下、同書からの引用は、(NLページ数) と表記する。

[2] 経歴、職歴などについては、本人がウェブサイトにて公表している。http://www.brianhenderson.net/

ティ、さらにはラカンやドゥルーズなど現代に至るまで多くの思想家によって多様に論じられてきた。

ヘンダーソンが詩集のタイトルに掲げた Nerve Language とは、『回想録』に登場する膨大な述語や新作言語のなかでもとりわけ重要なものとして数え上げることができる、「神経言語(Nervensprache)」のことである。「神経言語」とは、神との間で「神経接続(Nervenanhang)」という多大な苦痛を伴う肉体的・精神的結びつきに捕らえられてしまったシュレーバーのもとに到来し、音声器官を介さずに直接神経の中へと声を響かせる言語のことである。シュレーバー自身の言葉によれば、それは「通常の人間には意識されることはなく」、「神経が外部からひっきりなしに動かされるような状況」として彼の精神活動に介入し、「思考強迫」と呼ばれる、意図しない思考を強制する力として作用するのである。[3]

ヘンダーソンの詩集には、『回想録』に題材をとった、狂気の始まり、狂人としての語り、奇跡や恐怖の体験、さらには妻 Sabine としての語りをそれぞれ一ページほどの短い詩によって表現したもの、そして最後にはシュレーバー自身としての注釈が収められている。個々の作品には、「脱男性化の奇跡」、「思考を読むこと」、「魂政策」、「描き出し」、「筆記制度」などのように、シュレーバー自身の用語や『回想録』を読んだ者であればそれと分かるような表現が、タイトルとしてつけられている。このことからも、彼が『回想録』に題材をとっているだけでなく、内容的にもそれに依拠していることは明らかであろう。

シュレーバーの『回想録』に霊感を得た芸術作品は、なにもヘンダーソンが初めてという訳ではない。ザクセン州の精神医療博物館のカタログにまとめられているように、1990年代後半頃から、『回想録』の価値、あるいは喚起力については、既に多くの表現者が注目してきた。ペーター・アンドロッシュは、シュレーバーに題材をとったオペラをオーストリアで上演しているし、マルティン・ブルクハルトは、『回想録』テクストからの引用と再構成によって、放送劇の作品を書いている。また、絵画としても、マルティン・キッペンベルガーが、90年代後半以降にシュレーバーのポートレートに『回想録』の引用を組み合わせた連作を残している。[4] さらに今回取り上げたヘンダーソンの詩集に加え、今春

---

[3] Schreber, Daniel Paul: Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken. Hrsg. von Gerd Busse. Gießen. 2003, S.46.

[4] Müller, R. Thomas (Hrsg.): angewundert. Hundert Jahre „Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken „ von Daniel Paul Schreber. (Ausstellungskatalog). Leipzig. 2004, S.71.

には、ハン・イスラエルスの伝記的研究[5] に依拠しながらシュレーバー親子の葛藤と入院後のフレックシヒとを中心とした、クラース・フイツィングの伝記小説『In Schrebers Garten』が刊行された。[6] オペラ、絵画、放送劇、詩、小説とあらゆる芸術ジャンルにおいて、シュレーバーのテクストが参照されているというのは驚くべきことかもしれない。シュレーバーについては、すでに精神分析や病跡学といった分野だけでなく、哲学や社会学、言語学といった方向からもその独自の用語法や世界観が注目されてきた。しかしながら昨今の芸術方面における受容は、これまでの学術分野一辺倒だった受容のされかたとはまた別の意味を持っているといえる。

精神病者、統合失調症患者、何らかの病んだ人間の創作物にたいして医学だけでなく、他の芸術家たちからも関心が寄せられるということは、むろんまれなことではない。20 世紀後半に、フランスの画家ジャン・デュビュッフェによって知られるところとなったアール・ブリュット(生の芸術)や、昨今のアウトサイダー・アートと呼ばれる芸術ジャンルを見ればそれは一目瞭然だろう。[7] シュレーバーとほぼ同時代に、『回想録』にも匹敵するような長大な宇宙冒険絵物語を残したアドルフ・ヴェルフリや、男性器をつけた少女たちが血みどろの戦いを繰り広げるという悪夢的な大長編を描き続けたヘンリー・ダーガーらには、多くの美術研究者や芸術家たちが注目している。

病者と芸術家については、すでに 19 世紀においても、ロンブローゾらが試みた天才と病者の比較に見られるように、ある種の親和性があるものと考えられていた。ロンブローゾの否定的な考えと意味合いは異なるにせよ、このような考え方をより広く一般に知らしめ、病者の言説が、いわゆる健常者にとっても無視し得ない価値を持っていることを、今日に至るまでわれわれに示し続けてきたのは、むろんフロイトである。フロイトは、論文「詩人と空想」(1908) をはじめとする一連の文学的創作活動を扱った論文、そしてもちろんシュレーバー論「自伝的に記述されたパラノイアの一症例についての精神分析的考察」(1911) に見られるように、病者に特有の言語活動や夢を分析し、詩人や芸術家の思考と比較することで、人間社会の根本をなす言語活動の深層を発掘しようと試みたのである。ヒステリー患者や精神病者の断片的な記憶や、破綻した語りから逆説的に言語と人間

---

[5] Israëls, Han: Schreber : father and son. 1989.
[6] Huizing, Klaas: In Schrebers Garten. München. 2008.
[7] アール・ブリュットおよびアウトサイダー・アートについては、服部正:『アウトサイダー・アート』光文社 2003 年を参照。

社会の特性を取り出してきたのが、この100年間の精神分析の成果であるともいえるだろう。

本稿でとりあげるヘンダーソンの詩集は、このようなシュレーバー受容ないし病者の言葉や絵画を読み解こうとしてきた一連の試みのなかで、どのような独自性をもっているのだろうか。

先に述べたように、ヘンダーソンの詩集は、それぞれ6編の詩から構成された11の章からなっており、最後に注としてそれぞれの詩についてのコメントが付されている。個々の詩についてのコメントは、断片的で謎めいているが、注の冒頭に述べられた一節から、彼の意図を読み取ることができる。

> いまやたしかにこの『回想録』は人々にとって、すくなくとも証拠として用いるには充分であろう—それどころか充分すぎるくらいであろう。あまりにも組織化され過ぎ、そしてあまりにも不可能な証明を意図しすぎていて、さらには付加的な書類—つまり臨床的な報告や、(新訳におさめられた) カルテのようなもの—もある。原則的にそれらが証明するものは正しいのだろうが—私はここで白状しなければならないのだが—、私が閉じ込められていたあの恐ろしい年月に書いたものは、けっして『回想録』ですべてではないのだ。いまあなたが目の前にしているものこそ、全く別のもの、私が守衛や医師たちから、そして他の者たちから守り抜いたものなのである。
> 多くの鍵—「官能は魂の状態」に見いだせるような—が死後の世界へと導くとはいえ、『回想録』を書くことは、私を自由にしたし、これらの詩を書くことは私に何か別のものを放出させた。(NL 108)

すなわち、この詩集においてヘンダーソンが試みたことは、シュレーバーを解読し、彼の病の根源を極めることであるばかりでなく、シュレーバーに成り代わって書かれなかった—あるいは発見されなかった—断片を補完することだったのである。

ヘンダーソンは、シュレーバーが『回想録』に書かれなかった断片として、この詩集を編んだわけだが、それでは Nerve Language というタイトルはどのような意味を持つのだろうか。シュレーバーの病あるいは病とともに語られたシュレーバーの世界観の中心をなすものこそ、「神経言語」であるということだろうか。少なくとも数編の詩のなかでは、言

語が中心的に取り上げられている。神によって外部から直接的に、自らの思考へと侵入してくる声としての「神経言語」。「神経言語」の介入によって断片化された自分自身の思考、そして彼を悩ませて止まない「言いさして止める制度」など、ヘンダーソンの詩には、シュレーバーの被った言語的な困難がそのままに描き出されている。いくつか具体的な箇所を挙げてみよう。

これらはみんな何をしているのか？
神経のかけらたち。
手袋をはめた指で、それらを投げ捨てよ。
稲妻のような煌きは
メッセージを載せて生きている。
それぞれがお前の生のすべてを内に含んでいる。(NL44)

開いた問いが、
お前は誰だという問いが、問われ
話す言葉は発言を
謙虚にも認めることができない。
言葉たちはその伝える内容を燃え上がらせる
私の神経は弾薬の通り道
ドアのもとではじける。
言葉たちはヨーロッパを焼き尽くした
100年もの間
そして煙突を彫り貫いて
空へと至り、いまでも
まだ伝えることのない魂が
立ち上るのを見ることができる。　(NL54)

神は私を通して世界を聞き、
私の耳は聞きながら血を流す。

私は蚊の音を聞く
私の皮膚の下へと唾液をすべりこませる蚊の音を、
そして朝の空気のなかでは、煩悶している。
部屋を横切って語られるそれぞれの語は、
雷鳴のように
私の頭を爆破する。(NL43)

上記の引用箇所以外にもいくつかの詩行のなかに、シュレーバーの思考に侵入し、その思考を操作し、彼を身体的にも責め苛む神経言語／神の言語のイメージが描かれている。また別の箇所では、このようにも述べられる。

神は太陽であり、むさぼり食うことを望む。
それはまさに判決文であり、
狂気とは何も関係ない。
そして神の言葉の中では、判決文は決して
完成されないのだ。(NL54)

どのようにしてひとつの文を完成させる途中で完成させないことができるのか。
どのようにしてこの結び目を解いているあいだに結びつけることができるのか。
文を作ること。それは不可能なことかもしれない。(NL15)

どちらの引用箇所も神によって語られた文章の不完全性や文を完結することの不可能性が語られている。これはシュレーバーがいうところの「言いさして止める制度」(System des Nichtausredens)、[8] すなわち神や魂たちが穴だらけの欠落文をシュレーバーの神経へと入り込ませ、シュレーバー自身はは煩わしくも、欠落を補わずにはいられない、という不快な状況のことを意味していることは明らかである。

ヘンダーソンの取り出した「神経言語」のイメージとは、このように、神経の中に入り

[8] Schreber. S. 216.

込み、思考を強要する反面、きらめくようなあるいは火薬のような起爆力を持った言葉である。また神の言葉は「言いさして止める制度」のように、いつも欠落だらけで、それを完成させることはできないのだ。

ヘンダーソンの詩は、たんにシュレーバーの『回想録』をなぞって、そこで語られたエピソードや苦難の物語を詩行へと移し替えているわけではない。シュレーバーが、思考の混乱や肉体を傷つける神の光線に苦しむと同時に、女性化とともに高まる自らの「魂の官能的愉悦」を感じ、ある種の性的快楽に耽っていたことからもわかるように、彼の世界にあるのは苦しみだけではない。

そして空は、
山の上の、山の上の
山の上の、官能的なもやの中に
近づいてくる距離を、ファローハーの
魂の夏のサファイア
飛びかかり、無数の目の牧草地へと
歓喜に満ちて落ちてゆく。(NL 65)

その時が来たら
私も逝くつもりだ
ただし慣例という
屈辱と解釈のカタログによるのでなく
それは私を無慈悲に分解する
私が愛する一者から遥か遠くで

私を軽くせよ、
　　吹き流されて
　庭の生け垣を越える
トウワタの種のように。(NL 95)

意味を充分に理解するのはかなり難しいが、これらの詩行に現れた澄み切った自然の描写や、何度か出てくる「官能的(voluptuous)」という語から、ヘンダーソンが『回想録』を補完するうえで、単にシュレーバーの病苦や不気味で不可解な世界観を引き写すだけでなく、その背後にある官能的な喜びの世界、あるいは神と一体化して宇宙のすべてを見ることになった全能者としてのイメージ、そして彼が見ている世界の美をも表現していることがわかる。私たちは、まさにこの点において、『回想録』という奇妙なテクストに引きつけられてしまうのではないだろうか。

ヘンダーソンの詩集は、シュレーバー自身による『回想録』のかくされたメモという形をとりながら、シュレーバーの経験した言語的な困難と、『回想録』における壮大で官能的な世界を描きだした。もちろんシュレーバー本人に成り代わって、彼の個人的で一回的な経験を、再解釈することの是非あるいは妥当性という面で問題は残るだろう。しかしながら、詩という表現様式を生かして、シュレーバーの独特の言語を喚起力を持った語の連関として提示したヘンダーソンの刺激的な試みは一定の成功を収めているといえよう。(Pedlar Press Toronto 2007)